

美は何にでも通ずる<sup>(※1)</sup>中21回卒 田代 徳太郎<sup>(※2)</sup>

昔、私が中学校に入学したばかりの頃、図画の先生が話されたこと「美と云うものは何にでも通ずる」と云うことで絵を画くことだけが美術ではない「常住坐臥すべて美につながるものだ。整理整頓はもとより、その置場所によって大変奇麗に見えるものである。家を造るにも店を造るにも商品を飾るにも皆美術の心得を応用すべきである」と云はれた。身のまわりにも気をつけて他人に不快感を与へないように気をつけるようにと、今にして見ると大きい美術の観点から説かれたことで、毎日の生活に人生の生き様にも考へるべきことと、心している次第です。

インキビンに蓋を（野辺<sup>(※3)</sup>先生）

矢張り入学したばかりの時、英語の先生の憶い出で今のように万年筆やボールペンなど使はない時代。英語を書くにはペンにインキをつけて書くので机の上にはインキビンが必ずあるのですが、そのインキは使って失くすよりインキビンをひっくり返してなくす方が多いのです。そこで先生はインキビンには1回毎に蓋をしなさいと云って、机の上を1人づつ廻って蓋をしないでいると叱られた。

今考へて見ると非常に注意の細かい思いやりのある言葉で字を教へるだけでなく、人生の躰、物を大切にすることを教へられたことだった。今時こんなこと云うと笑はれるが大正7、8年（70～80年前）頃、今の日本とはケタ外れで、母親は夜遅くまで衣服の繕い、食糧の芋や、大根を刻んでいた時代インキビン1個買うにも気を使った時代で先生の気配りに感謝する次第です。今は受験受験で人生を教へる先生が少なく漸く大学を卒業しても人として道（相手を思いやる気持）・善悪が判らずいろいろの事件が起きているのではないだろうか。

日本人は話下手である。

これも英語の先生のお話し、旅行の場合2時間も3時間も汽車の中で隣の人と一言も話をしないで過ごすなど外国では、ないことだ。これは最初のキッカケが一番大切に腰を下す時に

ここは空いておりますか？ ではかけさせて貰います。

どちらまでですか？

こうゆうことが話のキッカケとなって後は何でも話が出来ようになるのだ。最初坐るとき、黙ってそのまま坐ると、なかなか話す機会がないものである。外国ではスグ話相手になってくれるので旅が長い程楽しい旅が出来ると云う話をされました。最初はお天気がよいとか悪いとか、こんにちは、いらっしゃいませ、だけでも話のキッカケで農家の方なら農業の話、季節や作物の話、サラリーマンならサラリーマンの楽しい話など、一寸話し出したら後は聞き役にまわって話の種を貯えてチョイチョイ出せば、結構楽しい話が出来るとはのではないだろうか。

自分は話下手なので先生の話が非常に参考になっています。

(※1) 「相中相高百年史」1998(平成10)年7月6日発行、「思い出の記」より。

(※2) 大正12(1923)年卒、小高出身。

(※3) 野邊千代八。相中教諭兼舎監 大正7(1918)年～大正8年(1919)年。